

めんたるねっと

VOL.23-1

No. 89

総会報告	2026年度総会の報告 ～設立25年を一つの節目に～	2
総会研修会報告	神奈川県域における実践的な研究の自分史 ～ 大正大学名誉教授 石川到覚氏 の講演から ～	3
新理事紹介	羽田舞子氏 / 「居場所」と「健康」がキーワードに	6
被災地より	地域に寄せる支援 ～「こもれび」「あいらぼ」から見える浜通りの今	8
活動報告	プレジョブスクール / 駄菓子屋カフェ / 子どもとみんなの食堂 Irodori / 新年度も変わらず楽しい場所に 事務局より / 予定・報告	10 11 12



居場所できつろぐ子ども・若者 イラストY.T画

設立 25 年を一つの節目に

～次のステップへ、皆さんと考える一年～

2026年度の総会が終了しましたことをご報告いたします。メンタルネットが設立登記してから今年8月7日で25年が経ちます。この25年、会員の皆様には大きなお支えをいただきました。誌面をお借りしてお礼申し上げます。

また、25年間一緒に運営を支えてくれた加瀬昭彦理事、20年間企業目線で支えてくれた加藤久博理事が勇退されました。法人の基盤強化という点において、多大な力をいただきました。心から感謝申し上げます。

また、新任理事として羽田舞子氏が加わるようになりました。Irodori、プレジョブを立ち上げてくれた仲間です。どうぞよろしくお願いいたします。

さて、本総会で提案させていただいた26年度の事業計画は、居場所と若者支援の事業を助成金事業にこだわらず縮小したまま継続し、メンタルネットの「次のステップへ向けた取り組みについて、会員の皆さんと一緒に考える一年にしたい」ことを提案いたしました。今年度中に「懇談会」の形で会員の皆様とお会い出来るよう、企画していきます。

設立当初、精神障がい者への就労支援が制度にもなっていない中、就労準備講座、職場定着支援を形にし、その成果を「障害者職業リハビリテーション学会・第34回神奈川大会 2006年」で発表できたのは、精神障がい者のリハビリテーションについて学会がやっと着目してくれたのだとうれしかった記憶があります。

その後、就労準備、定着支援が労働局から発生し、福祉局へと広がり、厚生労働省の中の取り組みとして、「障がい者の自立支援」をキーワードにした制度が進んでいきました。同時にメンタルネットの取り組みも精神障がい者の就労支援だけでなく、「中学生や若者の生きづらさ」へ着目する視点に変化していきました。

2015年から5年間は、「かながわボランティア活動推進基金21」で神奈川県こども未来局青少年課、神奈川県教育委員会高校教育課と協働した「かながわ

プレジョブスクール」(継続中)を形にできた成果は大きく、生きづらさを抱えた若者が第1歩を踏み出すスタート時に役立てられる学習本として「キャリアデザインハンドブック」を出版することができました。わずかではありますが、医療・教育機関にも使ってもらえています。

横浜市の補助事業である「よこはま型若者自立塾」はプレジョブスクールの運営実績を通して、3年間の契約の中の実施ではありますが、別な成果を得るための事業として取り入れることになりました。すなわち、プレジョブスクールに参加するまでに至らないと思っている当事者・家族・支援機関に向けて、発信できる事業にしたかったのです。事業運営の縛りは「6カ月間で一定の成果を出す」というものです。一定の成果を「次につなげる」としてスタートし、全員を次につなげることができました。

また、居場所事業では、数多くの企業ボランティアが取り組みに参加してくれ、アドバイスをいただくことができたのは大きな成果でした。さらに新しい試みとして、中学校を拠点とした出張 Irodori を月1～2回開催し、成果につながったことや、地域の民生・児童委員の活動、地域福祉の仕組みを学び、地域に向けて「居場所ガイドブック」を作成・配布し、「心配な、気になる子ども」がいたら、発信して繋げる道筋を示すことができました。

この3年間は、補助金、助成金を活用しながら、まだ制度になりきらない枠組みについて、提案する事業が展開できました。今年度より横浜市では「不登校・ひきこもり支援」を福祉局が担っていくことになりました。変化の年度でもあります。制度が軌道に乗るまでの仕組みづくりにも加わって行けたらよいなと思っています。

(YMSN 鈴木弘美)

神奈川県域における実践的な研究の自分史

～大正大学名誉教授 石川到覚氏 の講演から～

2001 年 4 月、「NPO 法人を設立し、港南区上大岡駅付近で新たな取り組みをしたいので賛同してください」と、ご自宅のお寺に無理なお願いにお邪魔してから 25 年、色々なポイントでご相談させていただいてきました。そして今回やっと、講演という形でお話しをしていただくことができました。「ただし、みんなと懇談形式だからね!!」と釘を刺されての講演会となりました。

石川先生から「事前に目を通してください」と宿題をいただき、講演会に臨みました。

本日のお話

1. 地域保健機関や社会福祉団体から学ぶ

- 1) 神奈川県内の保健所・精神衛生センターの学び
- 2) 救護施設や自主研究会からの学び
- 3) 社会福祉協議会の実践と研究からの学び

2. 県域の地域活動から学ぶ

- 1) 当事者活動からの学び
- 2) 地域作業所の創設運動からの学び
- 3) 地域作業所やグループホームづくりからの学び

3. 地域共生社会をめざす協働の実践から

- 1) 県内外の先駆例から“三ツ輪モデル”の生成
- 2) 地域ケアの担い手づくりの歩み
- 3) 地域共生社会づくりの担い手

お話は、「地域共生社会に向けた精神保健福祉の回顧と展望 ～神奈川県域を中心に 1970 年代より実践的な研究の自分史から～」(大正大学社会福祉学会『鴨台社会福祉学論集 第 33 号』)の中で発表している論文が、精神保健福祉が制度化された真っ只中にあって、どのように現在に至ったのか、その間の研究や話し合いの中での気づきと実践などが語られています。その中で当日は、赤で示されたことを中心にお話しいただきました。(本報告は論文から引用しています)

石川氏は 1972 (昭和 47) 年、国立精神衛生研究所に就任した後、神奈川県立精神衛生センター(以下、県センター)に着任しました。県センターでは個別援助の精神衛生相談と訪問指導によるケースワークから集団援助の生活指導教室や家族教室のグループワーク、組織援助の患者会(若竹会)や家族会(青い麦

の会)および断酒会(鎌倉断酒新生会)などのコミュニティワークなどに「研究」の視点から関わっておられました。

1. 地域保健機関や社会福祉団体から学ぶ

3) 社会福祉協議会の実践と研究からの学び

神奈川県社会福祉協議会(以下、県社協)は、県民参加を促す「神奈川県ボランティアセンター(以下、県 VC)」を 1977 (昭和 52) 年に設置し、1982 (昭和 57) 年に「精神衛生ボランティア研究委員会」を設置して全国の先駆的なボランティア活動例の訪問調査を実施しています。そのうえで県内の精神病院はじめ保健所や地域作業所および当事者団体などの実態調査を踏まえながら「精神衛生ボランティア育成プログラムの開発的な研究」の報告書をガイドラインに学習プログラムを試行的な実施として進められています。

その学習内容は、まず 1 年目の「基礎コース」が精神衛生の基礎知識と当事者活動と専門職活動を理解したうえで、2 年目の「リーダーシップ・コース」が小グループのチームワークによる体験学習を経たのち、3 年目の「オーガナイザー・コース」がボランティア・グループに期待される新しい精神衛生知識や地域精神衛生活動の体験などの学習を続ける 3 年間におよぶ実践的な学習課程となったとのこと。【一部引用】

蛇足になりますが、筆者は第 1 回受講生であり、この影響もあって、段階的に学び続けることの大事さを教えられたと改めて確認しました。このボランティア講座から、「神奈川県精神保健ボランティア連絡協議会」が生まれ、県内だけでなく全国に広まり、精神保健福祉の発展に大きな影響を与えた研究実践になりました。

2. 神奈川県域の地域活動から学ぶ

1) 当事者活動からの学び

神奈川県域では、1960 年代に家族会が生まれ、県センターは県保健所と共に実態調査などを意欲的に進めていました。その調査研究などが厚生省へ届けられ、精神障がい者福祉の制度化を求める提言や法改正に貢献したと、石川氏は語られました。

2) 地域作業所の創設運動からの学び

【以下引用 神奈川県は、「地域」を冠する事業名称の知的障害者と身体障害者が利用対象となる「障害者地域作業所指導事業」による運営費補助制度を開始した2年後に国の制度改正より早く神奈川県域における精神障害者地域作業所運営費補助を始めた。その先駆けが1977（昭和52）に川崎市が家族会（あやめ会）に委ねた「あやめ作業所」の創設に始まり、1981（昭和56）年には鎌倉市の「青い麦の家」と横須賀市の「はまゆう作業所」が開設された後、横浜市も神奈川県の協調事業として運営費補助制度を開始した】

当日参加の三村氏は、当時を振り返り「子どもの通学時間帯に精神障がい者に同じ道を歩いてほしくない」と言われ、毎日送迎車を出していた苦勞を話され、創設当初は鎌倉でも同じようなことが起きていた地域の実情を紹介されました。また、その後結成された「神奈川県精神障害者地域作業所連絡会」とボランティア講座とが相互作用することで、循環する地域共生社会への道が開けていった、とも語ってくれました。

3) 地域作業所やグループホームづくりからの学び

1970 年横浜市保健所に家族教室や生活教室を開始したのち、1975 年に家族会が発足し、以降横浜市内にも次々と地域作業所が設立されました。グループホームも開設されて、入院治療しかなかった精神科領域が、地域社会と共にリハビリテーションしていく仕組みができていきました。石川氏は、自らのお寺の境内に作業所とグループホームを建築し、地域がどう受け入れ、何を考えているのか、地域にあるお寺の住職として、日々施設運営を見守っていたことを語られ、専門家とボランティアと当事者の力が交じり合うからこそ生まれる地域共生社会が作り出されたということの説明されました。

また、グループホームの嘱託医だった加瀬医師は、ある夜の緊急電話の内容が「水道が凍結して水が出ません。どうしたら良いでしょう」それは医師にではなく生活者としてのノウハウを求めるものだった。という具体例を紹介されました。

3. 地域共生社会をめざす協働の実践から

1) 県内外の先駆例から“三ツ輪モデル”の生成

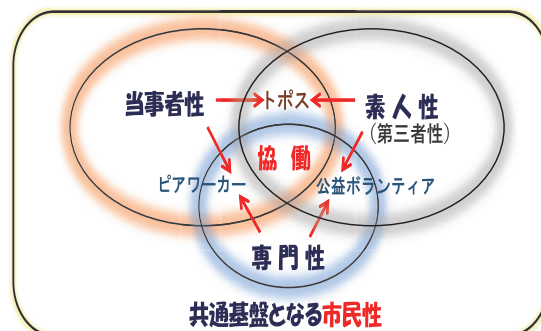
【以下引用 ソーシャルワークで循環する地域共生社会のイメージ図は、35 年前、神奈川県内の先進的な精神病院・患者会と精神衛生ボランティアとの共同研究を通じて「三ツ輪モデル」の着想が確信に変わったのは、自坊の境内に地域作業所を提供した後、グルー

プホームづくりのための懇親会場において3者の特性が協働した場面であり、まさに「邂逅」となった心打つ衝撃的な交流場面であった。そこでソーシャルワークで循環させる地域共生社会づくりは、各地域の共通基盤の「市民性（共生理念）」を「3つの基本特性が地域で協働（和合）」ことであり、当事者とボラ

ソーシャルワークで循環する地域共生社会

◆共通基盤の市民性(共生理念)と3つの基本特性が地域で協働(和合)

- ◆当事者と素人と専門職の三者は、それぞれ固有の特性と機能を有している。
- ①当事者性で注目すべき特性は、ピアサポート(セルフヘルプグループ)が典型である。
- ②素人性が発揮される特性は、多様なボランティア活動に象徴される。
- ③専門性には、すぐれて価値と知識と技能が期待される。

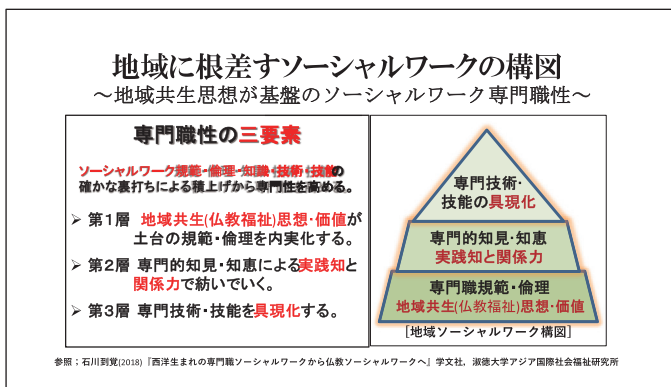


通称“三ツ輪モデル”「ソーシャルワーク協働循環・志向モデル」石川到寛997

ンティアとソーシャルワーカーの3者は、それぞれ固有の特性を発揮するからである。①当事者性で注目すべき特性は、ピアサポート（セルフヘルプグループ）が典型であり、②素人性（第三者性を含む）が発揮される特性は、多様なボランティア活動に象徴され、市民性のあるボランティアの参入が従来の地域精神医療を大きく変革させたソーシャルアクションの諸活動に見られ、③専門性には、すぐれて価値と知識と技能の3要件が必須となり、3者の「協働」を推進する役割を担って循環を生み出す構図となる。このモデルの具現化を図るためには、医療と福祉の2頭立て馬車のようなカナダの「バンクーバー・モデル」から着想した「CPP モデル①コンセプト(Concept) ②プロジェクト(Project) ③プログラム(Program)」の3要件を整えることが大前提である。因みに「連携」という概念の具現化は、地域連携における「医介連携」をはじめとして教育場面でも「連携教育」による養成及び育成が始まっている。その一方、「協働」の概念化は、未だに定まっていない。それは協働の形態や類型の多様性を伴うからだろう。しかし、地域共生社会づくりには、政府が示すシステムそれ自体の検証とともに、各地域の包括ケアシステムを循環させる地域コミュニティづくりには、三ツ輪モデルのような3者特性による協働なくして成り立たない。】

3) 地域共生社会づくりの担い手

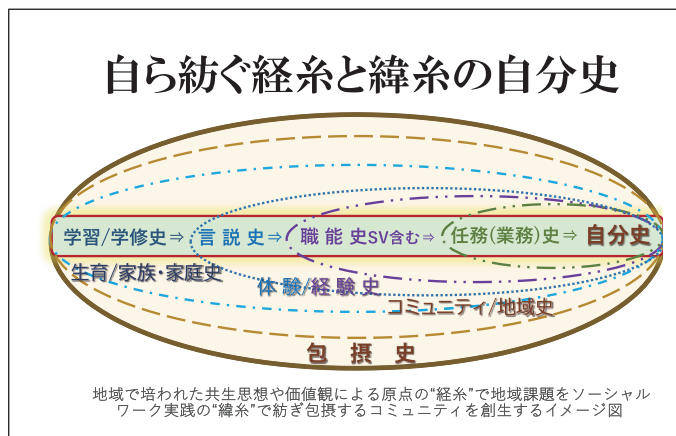
【以下引用】地域に根差すソーシャルワークとして仏教福祉（共生）思想による価値形成を土台に専門職性の3要件が3層に積み上がるイメージとした。ここ



で示す地域共生思想とは、自然科学の生態学 (Ecology) という共生概念や仏教という共生理念を包摂する概念として用いている。

因みに日本では、生物学者の三好孝の訳語とされ、先の椎尾弁匡は、近代社会事業の黎明期に仏教哲学による「共生（ともいき）思想」の提唱を踏まえたソーシャルワーク規範・倫理の上に知識・技術の確かな裏付けで積上げる関係力でもって専門性を高めるようなピラミッドを形成する。その土台となる第1層が地域で培われた共生（仏教福祉）理念と価値観を据えた規範・倫理の内実化であり、近年、アジア発信で注目されるグリーン（環境）ソーシャルワークの価値観とも底通する。第2層が専門的知見・知恵による実践知を関係力で紡いでいく。そして、第3層の専門技術・技能によって具現化させる「地域ソーシャルワーク構図」の再提示である。】

さて、これらの研究と実践や地域共生などが、どのような自分史を生み、社会を作り上げたのかということを次のスライドで説明されます。



【以下引用】このスライドは、「2019年8月30日(金)」に名古屋国際会議場で公益社団法人 日本精神保健福祉士協会 第55回全国大会・日本精神保健福祉士学会

第18回学術集会の基調講演「原点の回帰からソーシャルワークの専門性を未来に向けて」と題したソーシャルワーカーの育成過程〈綴織・金糸瓜・きりたんぼイメージ〉の修正再掲である。

自らの原点をつなぐ経糸は、ソーシャルワーカーである自分史を形成する人生ないし生活史で形成される。一人ひとりの原点としての道筋を歩む史的な時間軸では、それらが影響し合っている「原点とは何か？」の問いを内省と省察によって重ねながら、自らが実践する地域で包摂するようなイメージ図として描いてみた。

私たちが生まれ育った家庭や地域の文化や風土で培われた規範や価値観などを基軸にした学修史や言説史の学びによって自分史の主たる経糸が強化される。それにソーシャルワーカーの職能史を通じてソーシャルワーカー・アイデンティティが確立され、職能の任務が遂行される中でソーシャルワーク業務(任務)史を通じて専門性も形成される。その道筋が社会的承認を得るような地域史の実践を共有し合いながら、多様な排除から脱却すべき総ての事象を包摂史によって統合されていくといったイメージを想い描いている。

そうした自らの原点を織り成すためには、地域で培われた共生思想と価値観を経糸にして個別課題や地域課題に対峙するソーシャルワーク実践の緯糸で紡ぎながら包摂していくというイメージ図でもある。そこで自らが原点とする経糸と緯糸の複合体を「綴織・金糸瓜・きりたんぼ」のようなイメージで描いてみたのは、それら複合的な原点を包摂し合って地域で共有する布を織り成せるか否か？ その専門性を堅持する自らの原点を踏まえながら紡ぎ続けたい。】

自ら紡ぐ経糸と緯糸が自信の関わる地域や体験、コミュニティに影響され、成長していく処での誰と何処で、どう関わるのかということを思い浮かべ、同時に先生の職能史が研究と実践を大事にしながら紡ぐ糸であることに納得させられました。最後に論文の中で「担い手」について触れています。地域共生社会を実践する人材と人財の必要性についての視点を持ちつつ、これからの地域共生社会に関われるよう、法人も成長していきたいと思いました。

(YMSN 鈴木弘美)

以下、会場の声から・・・

- ・ 素人性が大事とされていることに心ひかれた。何も勉強していない自分のような者が支援者として働いてよいのか、自問自答していた。資格は取ったものの、なお不安だったが、先生の話聞いて、背中を押してもらえました
- ・ ソーシャルワークの大事な視点を地域共生という視点で考えることができ新鮮な学びになりました

自己紹介

～「居場所」と「健康」がキーワードに～

羽田 舞子(作業療法士、公認心理師／YMSN理事)

初めまして。この度、新しくメンタルネットの理事をさせていただくことになりました羽田舞子と申します。今回は誌面をお借りして簡単な自己紹介をさせていただきます。

私のメンタルネットとのお付き合いをつらつらと思い出すと、初めは新横浜でやっていた SST 研修に参加させていただいた時でした。それから色々ありましたが、今はたまに土曜日の昼食会や話し合いに参加しています。先日昼食会に参加しましたが、たまにしか参加しない私にも居場所を提供してくれる、ゆるく温かい空気を改めて感じました。メンタルネットの活動は、子どもから大人までが成長したり、回復したりできる居場所を作って守っていくことだと感じています。

今の私の平日の居場所は十数年前から茨城にあります。通勤の電車からは、初夏の青々とした田んぼ、真夏の紫の筑波山、冬は川から立ち上る霞、など都会とは違った景色が楽しめます。病院勤務なのですが、患者さんと農業をする時間があり、その規模はおそらく多くの方の想像を上回ると思います。畑仕事をしながら改めて思うのは、人の回復や成長には、その人が本来持っている健康的な部分がどれだけ大きくなるか、それを自分で自覚できるかがとても重要ということです。そのための手段は農業でもいいし、昼食作りでもいいし、カードゲームでも、何でもいい。安心できる居場所でそれをやりながら他の人と交流し、対話するなかで「健康」が育っていくのだろうな、と思っています。



米作りもします



果樹園もあります



畑の一部！

← 30分で収穫したナスの量



農業のこととなるとつい熱が入ってしまうのですが、私が関わっている別な仕事のことに触れたいと思います。発達障害を持つ大学生のグループを数年前からやっています。先ほど紹介したように広く自然豊かな場所ですが、それは一人暮らしをする大学生が多いということでもあります。友だち作りや学校生活にストレスを感じる人にとっては、一人、家で過ごす時間が増えて孤立しやすく、悩みを抱えたまま少しずつ学校から遠のいてしまう場合も少なくありません。発達障害という同じ特徴を持つ学生同士が出会い、発達障害への知識の共有とともに、学生生活での悩みやコミュニケーションの工夫の共有する場として、このグループがあります。

参加者は自分の状態や気持ちを言葉にするのが上手な方が多く、聞くと心情を丁寧に説明してくれます。その言葉を聞く中で特に印象的なのは、グループに参加する多くの学生には友人がいるということでした。「普通の人はこちらで笑う」「多くの中はこうする」「会話についてはいけないけど、こうすれば変に思われない」などの学習に基づき沢山の空気を読んだ結果、友人ができています。一方で、相手にとっては日常の何気ない会話であっても、頭がフル回転で空気を読み続け疲れ切ってしまうとのことです。「こうするべき」のコミュニケーションスキルは持っていますが、それが最終的には自分を疲労させ、対人交流への抵抗感につながってしまっています。

グループの中では、大学の中には他にも発達障害を持つ学生がいることや、空気を読み続けることへの疲労感があるのは自分だけではないこと、コミュニケーションをとらなかったとしても自分の居場所はあること、などを感じ、少しでも疲れが軽くなることを心がけながらやっています。

もちろんグループの進め方の工夫や、大学内部署と病院との連携の取り方、など運営の形式は色々あるのですが、参加する学生には「発達障害を持つ学生としての居場所」が提供できればいいな、と思っています。

現在私は、この学生グループやデイケア、病棟で仕事をしていますが「居場所」と「健康」というのが自分の中でキーワードになっている気がし、そのヒントはメンタルネットの活動からも得られると思っています。今後、理事として関わらせてもらう中で、自分に何ができるのかは全く見えてはいません。しかし、新たにひとつ与えてもらった居場所で、メンタルネットの為に自分が何ができるのかこれから考えていきたいと思っています。

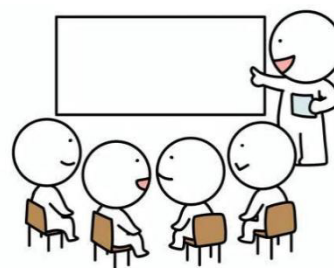
どうぞよろしくお願い致します。

2026年度「YMSN研修会」のご案内

- S S T初級研修会
- S S Tアセスメント研修
- S S T再入門
- グループワーク研修
- 法人の将来

上記、企画中です。

日程が決まり次第、ホームページやMLで発信します。



地域に寄せる支援

～「こもれび」「あいらぼ」から見える浜通りの今～

片柳 光昭（ふくしま心のケアセンター避難地域支援センター長）

私が勤務するふくしま心のケアセンター避難地域支援センター（以下、センター）では、今年4月から二つの新たな事業を開始した。学校に行きづらさを感じている子どもや若者、自宅以外に安心して過ごせる場所がないと感じている人のための居場所「こもれび」と、不登校などの子どもがいる家族の交流の場「あいらぼ」である。それぞれの事業の詳細については、文末のQRコードからご覧いただければと思う。この二つの事業は、私が昨年4月にセンターへ着任して間もない頃から、原発事故による被災の影響が今なお色濃く残るこの地域に、できるだけ早くこのような場をつくりたいと考え、スタッフとともに準備を重ね、実施に至ったものである。

原発事故による被災と聞くと、放射線や原発事故に関する風評被害を思い浮かべる方もいるだろう。しかし、この地域の暮らしへの影響はそれだけにとどまらない。震災と原発事故から16年目の浜通りには、地域に帰還した人、避難先での生活を続けている人、そして新たに移り住んだ人など、さまざまな背景を持つ人々が暮らしている。懸命な復興が進む中、帰還が比較的進んでいる地域がある一方で、今なお帰還が進まない地域もある。また、震災前から暮らしてきた住民よりも、新たに移り住んだ人の数が上回る地域もある。それぞれの地域がたどってきた復興の歩みも、現在抱えている課題も一様ではない。人のつながりや地域の暮らしは、時間が経てば自然に元の姿へ戻るものではないのである。

そのような状況の中、昨年度から子どもや若者に関する相談依頼が増加した。なかでも、「学校になじめず、登校することができない」「自宅以外に過ごせる場所がなく、一日中動画を見たり、ゲームをしたりして過

している」といった相談が多く寄せられた。このような子どもの姿は、全国のさまざまな地域でも見られるものかもしれない。しかし、たとえ表面に現れている様子が同じであっても、その背景は一様ではない。この地域では、先に述べた通り帰還した人、避難先での生活を続けている人、新たに移り住んだ人など、それぞれが異なる経過をたどりながら生活している。そうした暮らしの経過の違いから生じる人とのつながりにくさに加え、子どもや若者が利用できる社会資源や公共交通機関の乏しさなど、この地域ならではの事情が重なっている。地域のつながりや生活基盤の変化による影響が、子どもや若者の孤立という形で表れているように感じる。

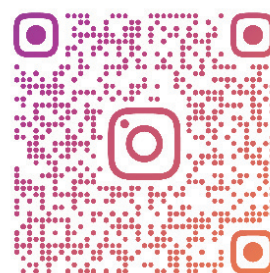
現在、「こもれび」には10名以上の子どもが登録し、1日に5名程度が参加している。学校と自宅以外で安心して過ごせる場所として、徐々に地域にも認知されつつあり、問い合わせも寄せられるようになってきた。学校に馴染めない背景は一人ひとり異なるが、ご家族からは「学校に行けなくなってからはずっと自宅で過ごすしかなかった。子どもが通える場ができて本当によかった」との感想もいただく。また「あいらぼ」では、子どもとのコミュニケーションに関する講座を開催したり、ご家族同士の分かち合いの時間を設けたりしている。「同じ大変さを抱えるご家族と実際にお会いして話しができて、私だけが辛いのではないとホッとできた」との声をいただいたことを、何よりありがたく感じている。

こうした声をいただける一方で、当センターが出会えているのは、この地域で困りごとを抱える子どもや家族の一部にすぎないとも感じている。これまで地域の保健師や支援者から聞いてきた声を考えると、安心

して過ごせる居場所がない子どもや若者、そして手探りのなかで支え続けている家族は、決して少なくないと思われる。

必要としている人がいる。それでも、まだ出会うことができない。その間には、私たちにはまだ見えていない何かがある。情報が届いていないのかもしれない。足を運ぶことへの不安があるのかもしれない。そもそも利用できる交通手段がないのかもしれない。あるいは、今はまだ誰かとつながる準備が整っていないのかもしれない。その一つひとつを決めつけることなく想像し、声を聞き洩らすことなく、場のあり方や情報の届け方を見直していく。そうした積み重ねによって初めて、この地域ならではの事情を踏まえた支援として機能していくのだと考える。

支援に地域が寄せるのではなく、地域に支援が寄っていく。支援に人が合わせるのではなく、その人に合った支援を形にしていく。福島の復興と、そのなかでの地域精神保健を考える鍵はここにあると強く思う。



AIRABO_KOMOREBI

https://www.instagram.com/airabo_komorebi/

不登校やひきこもりの子どもを持つ家族の交流事業

あいらぼ

「子どもが学校に行かない」
「この先どうしたらよいかかわからない」
「誰かと話をしたいけど・・・」

不登校やひきこもりの子どもを持つ保護者を対象に、安心して集い、語り合い、対応や学びの場となる「居場所」をつくりました。

主な内容

- 「話してもいい」「聞くだけでもいい」皆様の、居場所です。
- ・子どもとの関わりを考えるセント
- ・気持ちを伝え合うための工夫
- ・参加者同士の交流、語り合いなど

実施体制

専任スタッフ
避難地域支援センター職員：公認心理師
精神保健福祉士
看護師等2～3名

開催日時・場所

日時：月2回 第2、4火曜日
10時～12時
場所：広野みらい
オフィス3階
※無料駐車場 あり
参加費：無料

いわき 仙台
● 広野駅
● みらいオフィス

お問合せ・お申込み ※参加ご希望の方は、お電話またはメールで事前にご連絡ください。

(一社) 福島県精神保健福祉協会 ふくしま心のケアセンター
避難地域支援センター 広野みらいオフィス3階
住所：双葉郡広野町大字下浅見川字広長44-3
電話：0240-23-5109 (受付時間：8時30分～17時15分)
メール：komorebi@kokoro-fukushima.org (担当：吉田、鈴木)

公式HP 公式SNS (Instagram)

子ども・若者の居場所づくり事業

「こもれび」

あそびにおいでよ！

学校には行きづらい、自宅以外で過ごせる場所が欲しい…
そんな10代の皆さんが、安心していられるスペースです

開設時間 火曜日 10:00～12:00
金曜日 9:30～15:30

場 所：ふくしま心のケアセンター 避難地域支援センター
広野みらいオフィス3階 フリースペース
(広野駅から徒歩3分/無料駐車場あり)

対 象：10代 (年齢については応相談)
参加費：無料 (事前登録が必要)

どんなことをするの？

ものづくり、趣味活動、おしゃべり会、散歩、屋外活動など…
誰かと話したり、ひとりで何もしないのもあり
途中で来ても帰ってもOKです

お問い合わせ・お申し込み先

※参加ご希望の方は、お電話またはメールで事前にご連絡ください

☎ 0240-23-5109 (受付時間：平日8時30分～17時15分)
✉ komorebi@kokoro-fukushima.org

(一社) 福島県精神保健福祉協会
ふくしま心のケアセンター
避難地域支援センター
双葉郡広野町大字下浅見川字広長44-3
広野みらいオフィス3階
(担当：吉田、鈴木)

公式ホームページ 公式SNS (Instagram)

ふくしま心のケアセンター

プレジョブ スクール

プレジョブ生は
6月に卒業時期を
迎えました。入校
した時期は皆違
うのですが、同時

期に進路を決めることができました。最後の3カ月間、残り時間を惜しみグループでも活動しつつ、それぞれ面談を重ねて、事業所見学、就職面接の準備、資格試験の勉強などに取り組んでいました。スタッフから、プレジョブでの変化や体験での様子をお伝えし、これからの目標を共有して次の場所探しをサポートしています。卒業後は、就職（契約社員、アルバイト）、福祉事業所、ハローワークで求職活動、と今のご自分

に合った進路を選びました。

プレジョブスクールが始まって丸10年経ち、卒業生たちの近況をお聞きすることがあります。「数年働いてみて、障がい者手帳を取ることにしました」「アルバイトを数年続けて正社員になりました」「学校へ進学して就職しました」など。送り出すときは「もう少し長く支援出来たら・・・」と思う所もあるのですが、苦労しながらも前へ進んでいる様子が伝わってきますと、あの時はあれで良かったのかなという思いにもなります。今年の卒業生たちが、これからもご自分の道を選んでいけますよう、応援しております。

（YMSN 山口 奈保）

駄菓子屋カフェ



梅雨の合間、久しぶりにカフェに足を運んでくれた方がいた。「母の介護が忙しくて、病院に行くほかに元気が出ず、家に引きこもっていました。今日は元気を出してきてみました」と、またある日は、

「進学したばかりで学校までの通学がきつくてダウンしていました。まずは報告まで…」と、またある時は、「いつもお世話になっています」とお中元を手に訪ねてくれる方がいらっやいます。地域の方のほかに、卒業生たちも気軽に遠慮なく立ち寄れるカフェになって良かったと、つくづく思うこの頃です。

（YMSN 鈴木弘美）

子どもとみんなの食堂

食堂はボランティアさんのおかげで成り立っています。スタッフも休日を返上してここではボランティアで参加していますが、毎回欠かさず、関わってくれているボラさんには、本当に助けられています。ご近所の方、遠方から来てくれる方と様々です。

主にカレー作りを担当してくれています。子どもには食材切りを担当してもらい、その間大人は見守るのですが、初参加の子は、包丁で手を切ったり、玉ねぎが目にしみて大騒ぎになったり、時には、走りすぎてすりむいたりする事件が起こります。見守っているボランティアさん一人一人が優しく声掛けし、傷を手当てしてくれるので、スタッフは安心して別の作業ができ、助かっています。素敵な応援者に感謝でいっぱいです。

（YMSN 鈴木弘美）

Irodori

4月から新しい年度になりましたが、本年度のIrodoriも去年までと変わらず楽しい場所として過ごせていると感じています。その中で目立つ変化の一つと言えば、メンバーのみんなの背がグングンと伸びていることです。去年の秋くらいに初めて会った時はまだ身長に子どもらしさがあったメンバーも、あっという間に背が伸びていき今年には抜かされるんじゃないかと思うほどです。成長ってこんなに目に分かりやすく伝わるんだなぁと少し感慨深くなりました。

6月に開いた子ども食堂ではスーパーボールすくいや割り箸で作った輪ゴム鉄砲の射的など、夏祭りのようなイベントを開催しようということで、Irodoriでは射的の準備などをしました。射的の的を作ったり輪ゴム鉄砲を撃つ場所はどこら辺がいいかなど、とても積極的に協力してくれました。いざ撃つ距離などが決まると自分たちで試してみようということになり、少し遊び始めるととても盛り上がりでした。

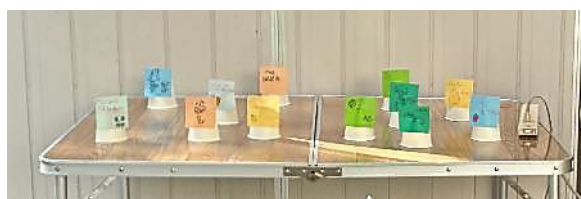
Irodori内ではそれぞれやりたいことが違ったりして、一緒に何かをするという事が難しい場面もありますが、この時はこちらが何かを言ったり提案することもあまりなく、メンバー間だけで「これはこうしたらいい」とか「ここからならやりやすいよ!」など言いながらとても仲良く遊んでおり、友だちとしての距離が一つ近くなったところを見られた気がしてとても嬉しかったです。

子ども食堂当日もIrodoriのメンバーはボランティアとして来てくれて、それぞれの案内係などのお手伝いをしてくれました。子どもたちに輪ゴム鉄砲の使い方やルールを教えたりと面倒を見てくれてとても頼りになるお兄さんとしての姿を見せてくれました。本人たちも子どもたちに何かを教えたりすることに楽しさや手ごたえのようなものがあって、手伝いだけでなく遊んできていいよと言って

射的ゲームで遊ぶ小学生と見守る中学生



中学生考案の商品付きの的



も「もっとこれをしていたい」と熱心に手伝いを続けるほどでした。

途切れることなく遊び続けるたくさんの子どもの面倒を見続けるというのは大人にとってもとても大変なことなのに、そこに楽しさを見出し、年齢が下の子たちに対して優しくできるというのは、背丈だけでなく内面も間違いなく大人になっているな、という成長を感じさせてくれました。

子どもたちの勢いがひと段落ついた後はボランティアの中学生たちにもスーパーボールすくいや射的などで遊んでもらい、一緒に作ったカレーを食べたり、カードゲームで遊んだりとても楽しそうにしてくれました。たくさん手伝いをしてくれて疲れはあったでしょうが、一つの楽しい思い出になってくれたら良かったと思います。

本年度もメンバーや私たちが様々な日常やイベントを通してゆったりと少しずつ成長していける一年になっていければと思います。

(YMSN 上曾晴斗)

ご寄付のお願いと報告

- ・ 会費をいただいた方(2026. 4.21~7.25)
 - ・ 吉野裕、渡辺和美、野末浩之、金山正恵、宮崎全代、佐藤幸江、岳瀬真理子、山本香奈芽、渡辺英俊、松本まさみ、久間久恵、長嶋悦子、石川到覚、加瀬昭彦、大平道子、大倉よしの、鈴木弘美、加藤久博、目黒明子、奥崎宏一郎、中島契恵子、山口奈保、片柳光昭、佐倉洋、森川充子、武井昭代、渡部恵梨子、小谷橙果、神奈川ゆめ社会福祉財団、山本圭子（以上、敬称略）
 - ・ 寄付をいただいた方（2026. 4.21~7.25）
 - ・ こども食堂参加者、福井里江、宮タズ、谷守、金山正恵、佐倉洋、武井昭代、鈴木弘美、中島契恵子（以上、敬称略）
- ・ ありがとうございます
- ・ 寄付をお願いいたします。
 - ・ 認定NPO法人なので、寄付をいただくと(所得税40%+住民税10%)最大50%の減税になります。今後ともご協力よろしくお願いいたします。

当事者のためのグループ活動

- ・ 就労フォローアップミーティング
 - ・ 年1回、OB会の開催
- ・ 就労者SST
 - ・ 日程 毎月 第1土曜日 時間 pm. 1:00~2:30 場所 YMSN
- ・ 当事者グループ活動

駄菓子屋カフェIrodoriイベント

「子どもとみんなの食堂」のご案内

- ・ 日程 毎月第2土曜日 1月・8月はお休みです
- ・ 会場 駄菓子屋カフェIrodori デッキスペース
- ・ 「子どもとみんなの食堂」 15時~17時 どなたでも(事前予約)

正会員：5,000円（個人） 賛助会員：12,000円（団体）

（正会員・賛助会員にはYMSN情報誌を無料配付）

振込先：郵便振替口座 00250-6-71607

横浜メンタルサービスネットワーク

会費を銀行・コンビニATMやネットから振り込む場合の入力方法をご案内します。

振り込み料は432円かかりますが、郵便局に行かなくても良いので楽は楽です。

（金融機関名）ゆうちょ銀行 （店名）〇二九

（種別）当座 （口座番号）71607

（名義）ヨコハマメンタルサービスネットワーク

季刊 YMSN情報誌 Vol. 23No. 1

YMSN 第89号 2026年7月31日発行

年間購読料1,000円（年4回発行）1冊頒価300円

発行：NPO法人 横浜メンタルサービスネットワーク

理事長 鈴木弘美 編集代表 森川充子

〒234-0052 横浜市港南区笹下 1-7-6

TEL 045-841-2179

FAX 045-841-2189

<http://forest-1.com/ymsn/>

e-mail: ymsn@forest-1.com